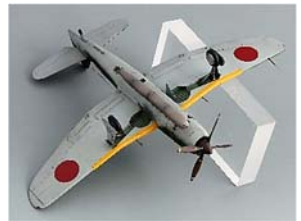


# ワケ カタチには理由がある(ワケ)

Shape follows Function & Taste

## ～愛知航空機 艦上攻撃機 流星(B7A)



本機、流星は戦争末期に登場した日本海軍の艦上攻撃機です。艦上爆撃機と(魚雷攻撃を行う)艦上攻撃機を統一するというコンセプトのもとで開発された機体で、胴体の腹に爆弾層を設け、主桁を胴体内部に通す中翼が選択されましたが、一方で、大径のプロペラのクリアランスを取るため胴体を持ち上げる必要がありました。このため、不必要に主脚が長くなることを抑えるために、逆ガル翼が採用されています(「艦攻艦爆隊」光人社NF文庫・設計者 尾崎紀男氏の記述)。連立方程式を解くような思考で、この形状が選択されたと考えるのは楽しいです。逆ガル翼は、大迎角を取った時に失速しやすい難しい翼型ですが、主脚が胴体下に大きく伸びることがなかったため、より水平に着艦できるようになったのは僥倖だったと思います。同じく逆ガル翼を有する米海軍の F4U コルセア戦闘機が、大迎角を取らないように尾輪を高くしたのと、奇しくも同じ原理となったのではないかと思います。100機程度しか生産されず、登場したときには搭載する空母さえも満足にはなかったわけですが、最も美しい日本機の一つで、「虎は死しても皮を残す」的な機体であったように感じます。

### 【模型について】

チェコの SWORD1/72 のインジェクションキットです。フジミから 1/72 の佳作キットも出ていますが、この SWORD のキットはハセガワの 1/48 のディメンションを参考にしたようで、フジミのキットより多少逞しい外観を有します。このキットは、爆弾槽が再現されているため、ネオジム磁石を使って、雷装／爆装の両者を選択できるように組みました。

(中川裕幸 2023年2月)